

2025大会
特別誌

Patent Search Grand Prix
特許検索競技大会

2025大会
最優秀賞受賞者
三分野ゴールド制覇賞受賞者が語る

AI時代だからこそ輝く、
調査の達人からのメッセージ！

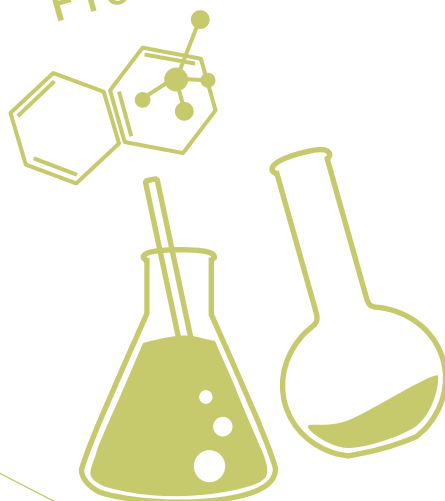
Mechanical
Field



Electrical
Field



Chemical and
Pharmaceutical
Field



特許検索競技大会は、2013年に工業所有権協力センター（IPCC）の主催としてスタートして以降、年々参加者が増加し、特許調査のスキルを測ることのできる唯一の大会として、皆様から愛されていることは大変喜ばしいことです。新型コロナウイルス感染症の影響により、開催自体が中止になったり、レベル認定が実施できない年もありましたが、2021年度にはリモート開催を開始し、2022年度よりレベル認定を再開、さらに2023年度からは会場開催も復活しました。2024年度には5年ぶりに団体の部を開催するとともに、スチューデントコースについては、学生以外の企業知財初心者の方々にも広くご参加いただけるよう、「ファーストステップコース」へと名称を変更しました。

2025年度には、特許検索スキルアップセミナーにおいて6年ぶりに会場開催を復活させ、東京会場ではウェビナーとの初のハイブリッド開催を実現しました。また、近年のAI技術の急速な発展と、調査実務におけるAI活用の重要性の高まりを踏まえ、対話型AIチャットサービスを含む各種Webサービスの使用可否について明記しました。会場型とリモート型を併用したハイブリッド形式も定着し、2025年度はファーストステップコースに535名、アドバンストコースに298名の方々にご参加いただきました。また、2025年度のゴールド認定者は10名となり、その中で全分野（電気・機械・化学・医薬の三分野）においてゴールド認定を受けた「三分野ゴールド制覇賞」が2名誕生しました。

本冊子では、最優秀賞または三分野ゴールド制覇賞を受賞された3名の方々にお集まりいただき、特許検索競技大会への意気込みや日頃のスキルアップに向けた取り組み方、さらには生成AIツールとの向き合い方などについてお話を伺いました。いずれも示唆に富んだ内容であり、日頃特許検索業務に携わっておられる方々はもとより、今後本大会で認定を目指される方々にとって大いに参考となるものとなっております。

本冊子が、皆様の実務および研鑽の一助となり、今後さらに多くの方々に本大会へチャレンジしていただく契機となれば幸いです。

特許検索競技大会2025実行委員会

委員長 角淵 由英

【弁理士法人 レクシード・テック パートナー弁理士 博士（理学）】

特許検索競技大会

日本で唯一、特許調査の実務能力を評価する大会

大会には、学生や企業の研究者等、知財初心者向け問題のファーストステップコースと、特許調査に必要な知識・技能を有し、特許調査業務等を実施しているプロ向け問題のアドバンストコースがあり、レベルに応じてコースを選択することができます。なお、2026年度からは上記2コースの中間レベルに位置する「プレアドバンストコース」を新設します。

ファーストステップコースとアドバンストコース受験者で成績（採点結果）が一定のレベルをクリアした方には、認定証を交付します。

学生・研究者等初心者向け

ファーストステップコース

● 認定

中級者向け（新設）

プレアドバンストコース

認定なし

上級者向け

アドバンストコース

3レベル

● ゴールド認定

● シルバー認定

● ブロンズ認定



会場風景



特許検索競技大会 2025 最優秀賞・三分野ゴールド制覇賞受賞者

最優秀賞

中川 紘子 NAKAGAWA Hiroko 三井化学株式会社 ➤ 化学・医薬分野

知的財産部 情報調査グループ 調査チームのチームリーダー。出願前調査や無効化資料調査、侵害予防調査など特許調査全般を行うとともに、社内の研究者や事業部員の情報調査教育コンテンツ作成や情報調査基盤構築を担う。



三分野ゴールド制覇賞

畔上 英樹 AZEGAMI Hideki 弁理士法人オンダ国際特許事務所 ➤ 電気分野

特許調査を行うこともあるが、現在は専らマネージャー職として特許事務所員の教育指導に携わる。



三分野ゴールド制覇賞

小田 紘之 ODA Hiroyuki トヨタテクニカル
ディベロップメント株式会社 ➤ 化学・医薬分野

IP商品開発・AIS支援グループ所属。普段は特許調査は行っていない。知財系の支援サービス開発を担う。



(敬称略)



最優秀賞・三分野ゴールド制覇賞受賞者との座談会

2025大会最優秀賞の中川紘子氏、三分野ゴールド制覇賞の畔上英樹氏、小田紘之氏をお迎えして、大会実行委員長の角淵由英氏、IPCC副理事長の小柳正之が、特許サーチャーとしてスキルをどのようにして磨いてきたか、特許検索競技大会をどのように活用してきたのかなどを、じっくり伺いました。

小柳：このたびは最優秀賞及び三分野ゴールド制覇賞受賞おめでとうございます。本日は、大会で優秀な成績を収められた皆様に、大会に参加するきっかけや日常業務、AIツールとの向き合い方、新しい時代のスキル、参加者に向けたメッセージ等をお伺いしたいと思います。

社内選抜から継続挑戦まで ～それぞれの大会参加の原点～

角淵：まず、これまでの大会参加履歴を教えてください。

中川：初参加は2014年でした。当時は調査会社で社内予選を勝ち上がって出場。2015年には電気分野でゴールド認定を取得できました。その後しばらく間が空きましたが、前回9年ぶりに再挑戦して、今回が4回目です。

畔上：大会創設に近い時期から毎年参加しています。社内でも自分の立ち位置を測る場として周囲に出場を推奨しています。

小田：2017年に初参加し、2018年に初めてゴールド認定を受賞しました。当時は参加枠の都合で社内予選もあったのですが、リモート開催が導入された現在は参加枠も緩和され、社内予選なしで参加した2024年にゴールドを獲得できました。



自然体で臨むか、補強して臨むか ～大会への向き合い方～

角淵：次に、参加目的や参加に向けた準備について教えてください。

小田：大会では、限られた時間内で正確に調査を遂行することが求められます。調査実務より条件が厳しいとも感じますが、文献を正しく読解し判断するというコアな部分は実務と共通しています。大会に向けては、生成AIの活用方針を大会ポリシーに照らして確認しました。また、不得意な化学・医薬分野に挑戦するため、社内の化学・医薬ゴールド認定受賞者から注意点を学ぶなどの準備をしました。

畔上：大会で問われる一連の調査プロセスは実務と共通しており、大会に参加することで日常の調査手法がどこまで通用するかを客観的に測れる点が魅力です。実務を通じて身に付けたセオリーを自然体で可視化したいので、特別な対策をしないで大会に参加するようにしています。

中川：何を問われているかを把握し、技術の本質を正確に見抜く。そして、限られた時間内で優先順位を付けて取り組む。これらは実務でも当然に求められることと考えます。大会に向けては、過去問を軽く確認したり、事前に公開される解答フォーマットに効率よく記入できる方法を思案したり、といった準備をしました。



調査目的が変われば、検索戦略も変わる

角淵：大会と実務との共通部分が多いとのことでしたが、普段の特許調査ではどのようなことに気を付けていますか。

小田：最も意識しているのは、調査対象の技術を正しく理解することです。理解が曖昧なままだと、無理に調査を始めたとしても、結局途中で「何か違う」と気付いてやり直す羽目になってしまいます。また、多様な経験を積むことで、分野による調査戦略を使い分けるようになってきました。具体的には、機械分野では、図面を見て判断できる技術も多く、その場合はキーワードで絞るすぎないスタイルが自然です。一方、電気、化学・医薬分野では、キーワードの選定や調査範囲を詳細に特定する必要があります。

畔上：同じ技術であっても、調査目的によってポイントが大きく変わる点に注意しています。具体的には、先行技術調査・無効化資料調査・クリアランス調査といった目的によって、検索式の立て方は全く異なりますよね。目的を的確に把握できている人が立てた検索式は、それを見ただけで「なるほど、こういう方針で調査するのだな」と伝わってきます。技術の理解と目的の把握、これらが揃ってようやく良い調査ができると考えています。

中川：技術の本質を理解すること、目的に応じて優先順位を付けること、これらはお二人と共通しています。加えて、調査結果が何に使われるのかを、最近強く意識しています。報告する相手（技術者・事業部門・経営層）によっても、強調するポイントやリスクの表し方も変わってきます。AIが発展することで、「単に文献を見つける行為」は容易になりつつありますが、“なぜそのような調査範囲にしたのか”、“どのようにしてその結論に至ったのか”を説明できる能力が、より重要になってきていると感じます。



見えにくい専門性をどう可視化するか

角淵：皆様が同じように、非常に高度な専門性と気配りをお持ちだと分かりました。一方、そういった専門性などは関係者に十分に伝わっているのでしょうか。

中川：一般論として、普段はサーチャーの調査スキルが関係者からは非常に見えづらいだろうと感じています。日々の業務を通じて、事業部門や技術者がサーチャーのスキルを判断するのは困難でしょう。だからこそ、この大会で表彰されることで、客観的に信頼できるサーチャーだと可視化されるのは意義深いと思います。

畔上：今回の受賞を事務所内で表彰されたことは、素直に嬉しく思いました。ただ、関係者から「ゴールド受賞者だから…」と過度に意識されるのには違和感があります。何故なら、大会当日は「できた」という確信はなく、蓋を開けてみたらゴールド認定という結果だったからです。実務も同じで、どんなにプロセスを正しく進めても、「本当に完全な調査をできたか」という不安は常に残ります。だからこそ、「ゴールド受賞」という結果だけが独り歩きするのは、少し怖さを感じることもあります。

小田：この大会があることで、サーチャーという仕事が“スキルの必要な専門職”であると関係者に伝わる点は、非常に意義があると考えます。会社としても、三冠ホルダーが在籍していることは、対外的なブランド価値にもつながるでしょう。また、大会への参加を勧めることで、会社全体で調査スキルの向上を図る取組の一環になっているともいえます。

角淵：高度なスキルをお持ちなのに、とても謙虚なところに驚かされました。



実務と大会、それぞれにおけるAI活用のリアル

角淵：ところで、今回の大会で生成AIの使用について、一定のルールを明記したわけですが、今後、AIツールとどのように向き合い、活用していくかについて伺います。

小田：実務では、ちょっとした調べものでもAIツールを活用しています。それまではGoogle検索でヒットした結果を1つずつ確認する作業を要しましたが、今ではAIが良さそうな情報を絞り込んで提示してくれるので、大幅に負担は減ったと思います。大会では、問1のような知識を問う設問は、AIにウェブ検索でヒットした資料に基づいて回答してもらい、自分はその資料を念のため確認して真偽を判断する、そういった活用をしました。

畔上：実務では、内容が難解な技術文献を要約させたり、既存の特許分類が使いにくい場合に独自の分類を付与させたりするのに生成AIを活用しています。大会では自分の素の実力を客観的に測りたかったため、あえて生成AIを使用しませんでした。とはいえ、AIツールの活用技術は新たな検索技術と捉えられると考えています。

中川：実務では、もちろんAIツールを使用しています。大会では、商用DBに付随するAI機能を活用しました。特に問3のように調査対象が限られているケースでは、類似順ソートで優先的に精読する文献と、斜め読みで済ませる文献とを仕分けことができ、所要時間の短縮につながったと思います。



AIが得意なこと、人が担うべきこと

中川：例えば、膨大な候補の中から有益な資料を素早く抽出するのは、AIが得意なタスクだと思います。また、対話型AIを使って壁打ちすることで、自分では気付かない癖やバイアスのようなものを発見できたこともあります。一方、侵害予防調査の調査範囲をどう定めるかとか、そもそも調査方針をどうするかといったことは、今後も人がやらなければならない領域だと考えています。

畔上：AIツールと人手ではスピードが全く異なるので、お客様の要望に応じて使い分ける必要があります。また、X 文献が 1 件あれば完結する先行技術調査とは異なり、クリアランス調査では懸念特許を確実に全て把握する必要があるため、人手による確認が不可欠です。

小田：生成AIを使用する際、学習時点の情報だけで回答する仕組みだと情報が古くなっているおそれがあります。生成AIが最新のウェブ情報を参照して回答してくれているのか、情報の出所・根拠を確認し、人が説明責任を果たせる形で使用していくことが重要だと考えます。



AI時代にこそ重要になるサーチャーの役割

角刈：メリットとデメリットを把握した上でAIツールを活用されており、調査のプロならではの視点をお持ちだと感じました。それでは少し抽象的な話になりますが、サーチャーに求められるスキルや役割は、今後どうなっていくと想像されますか。

小田：コミュニケーション能力は必須だと思います。例えば、お客様がどんな調査をしたいのかを具体的に説明できない場合には、背景事情や目的などをヒアリングしつつ、必要な情報を補いながら調査方針を立てていくことになります。この場合、たとえAIツールをお客様が導入していたとしても、どんな風に問いを立てれば良いか分からずにお困りなのではないでしょうか。サーチャーは、お客様の目的を補完し、どのように調査結果を活用するかまで含めて設計していく役割を担うのだと思います。

畔上：同様の意見です。AIツールの提案内容をそのまま伝えるだけではAIに代替されてしまうでしょう。お客様が何に困って相談にみえたのか、その背景や事情をヒアリングして課題を定義し、どのような調査や対処法が考えられるのか、リスクも含めて提示できることが必要です。真にお客様の役に立てるパートナーとしての役割が求められていると考えます。

中川：私も同感です。かつては、調査といえば文献を探し出すこと、そこに能力と時間の大半を使っていました。しかし、AIツールの登場で大幅なスピードアップがなされています。そうすると、相対的に重要性が増すのが前工程と後工程ですね。依頼元の求めていることを明らかにしたり、調査結果を分析してどのように説明するかを工夫したり、よりウェットなコミュニケーション能力が必要になっていくと思います。



AIによる代替という危機感

角刈：コミュニケーション能力の大切さを挙げていただきました。その一方で、少し意地悪な質問かもしれませんが、AIに仕事を代替されるのでは、といった危機感があれば教えてください。

小田：一部の作業はAIに代替されていくかもしれませんが、私が現在所属する部署はAIを活用したツール・サービスを企画・展開していく立場にあります。AIを生かしつつ、人がより付加価値を高めていけるような仕事をしていきたいと考えています。

畔上：極端な話ですが、AIの更なる性能向上と普及により、お客様の中で特許調査が完結するようになれば、調査会社への依頼は無くなってしまうかもしれません。そういう危機感は抱いています。その一方で、AIによる効率化の先に、見たい情報だけに目を向ける、つまり視野が狭くなるリスクに懸念を感じています。私の場合、お客様の依頼の経緯を踏まえて、調査テーマに適合しない特許を追加的に報告することがあります。こういった文献は技術者・研究者の視野を広げるために有効ですが、メインテーマに照らすとハズレ文献なので、AIでは提供できない付加価値だといえるかもしれません。

中川：特許調査へのAIの活用が進むことにより、従来型の業務の進め方ではいけないという危機感があります。すべての社員がAIツールで調査することが当然の世界になっていくでしょうから、私たち自身もAIを使いこなしつつ、AIによる調査結果をどう活用するか提案できるような、依頼元に伴走していく業務にシフトしていくのかなと想像しています。



AI時代における人材育成という新たな課題

小柳：多様な立場の皆さんから、それぞれのご意見をいただきました。次は少し人材育成の観点からお聞かせください。皆さんのようにスキルが高い方がAIツールを使いこなし、AIができない部分は皆さんの知識をAIに学ばせる、現状ならそういうことも可能でしょう。しかし、皆さんが第一線から退かれた後、誰がAIに教えることができるのでしょうか。

中川：現状は、まさにAIツールを業務で利用できるようにするため、過去の知見を集約してAIに活用させられるよう取り組んでいます。将来的には、このプロンプトを使えば良いとか、この技術なら1クリックで基本的な検索式はできるよとか。ただ、AIの出した提案から微修正する能力をどう育てていくかは、まだ想像できていないのが現状です。

畔上：人材育成は悩ましい問題です。この調子でAIツールが普及していくと「何故こんな検索式を立てたのか」という問いに対して、「AIがそのように提示しました」と回答する若手が現れるかもしれません。自分の行う調査方針に根拠を持っていないのかと愕然とすることでしょう。AIが示した提案について、その適否を判断するために、自分の中にベースとなる知見を持たなければならない。そういうことを伝えるようにしていかなければならないのかもしれないかもしれません。

小田：AIがどんどん進化しているので、どんな風に活用すると、どんな調査ができる、みたいな知見を共有する仕組みが必要になっていくかもしれません。



実務に即した「進化しつづける大会」への期待

角淵：今回の大会では、制約はありますが初めて生成AIの利用を認める方向にルール改訂しました。今後の大会に期待することを教えてください。

中川：この大会は実務に即した能力を測る場ですから、現実の業務に生成AIが使われている以上、時代に合ったルールが示されたという点で非常に大きな意義があったと思います。現状は、特許調査従事者レベル2をターゲットにした設計がなされていますが、AIを無制限で活用するスキルを競うのであれば、レベル3をターゲットにした設計が必要になるかもしれません。

畔上：生成AI無しの実務は考えられません。先に申しましたように、AIツールの活用技術も検索技術のひとつだと思います。この点で、今後も大会に取り込んでいただくことを期待します。AIツールの活用を測れるような設問、例えば、期待されるアウトプットを出せるプロンプトを一定の時間内で構築するスキルを測れる出題とか、人手ではとても確認できない膨大な量のデータからどんな傾向が読み取れるかという出題をしてみるとか。私にとっては挑戦しがいのある設問になっていくと思います。

小田：生成AIが使用可になったのは、実務に即して非常に良いことだと思います。また、参加者の条件を揃える意味で、ログイン無しにしたところにも工夫が感じられました。単なるセミナーではなく、この大会のように同条件で競い客観的評価と順位が出る仕組みは貴重で、今後も維持してほしいです。なお、自分が出題者だとしたら、例えば、生成AIに丸投げしても正解が出ない設問を混ぜることで、基礎力のある参加者が上位に来る設計をしたいなと思います。

今後の参加者へのメッセージ

角淵：最後に、これから大会に参加される方々へのメッセージをお願いします。

小田：今回、生成AIを使用可能になったというのは、大きな変化だったと思います。大会のルールはこれからも進化していくと思いますが、人のスキルが問われる期間はこれからも当面続くだろうと見ています。最近の調査実務に沿った内容が出題されるので、自身のスキルを測る又は磨く機会として、ぜひ挑戦してください。

畔上：大会を通じて、より多くの知見を得た者が、真の勝者だと思います。生成AIに慣れ親しんでいる若い人にも、古典的な検索技術から始めたベテランにも、新しい着眼点を得られる大会になっていると思います。互いに学び合える大会であってほしいです。

中川：若手のサーチャーにとってはスキルアップの場として強く推奨します。私自身、大会の結果に悔しい思いをしてきましたが、その思いが実務での能力向上に生きてきたという側面もありました。参加者同士で切磋琢磨していけたらと思います。



小柳：運営側として、今後も大会の魅力をより高めて、より多くの方々に参加していただけるよう、取り組んでいきたいと思っています。本日は有意義なお話をありがとうございました。